

聖書：ガラテヤ 4：21～31

説教題：奴隷の子か、自由の子か

日時：2013年3月10日

今日の箇所はガラテヤ人への手紙の中でも最も難しい箇所です。その理由の一つは、まず旧約聖書の登場人物についての知識がなくてはならない、すなわちアブラハム、サラ、ハガル、イサクといった人物についてのある程度の知識がなくてはならない。それに加えてシナイ、アラビヤ、エルサレムといった地名、さらには「上にあるエルサレム」という表現も出て来ます。そして一層難しくしているのは、比喩が語られていることです。24節の「比喩」という言葉は、いわゆるアレゴリーという言葉です。つまり字義的な意味と言うより、寓喩的な表現です。このことを良く踏まえないと益々分からなくなります。たとえば25節に「このハガルは、アラビヤにあるシナイ山のことで」とありますが、どうしてハガルがシナイ山なのか、チンプンカンプンになります。さらにその後、このハガルは「今のエルサレムに当たります」と続くのを見ると、益々頭が混乱してしまいます。しかしだからと言って、この箇所を飛ばすわけにもいきませんので、難しいことは覚悟しつつも、何とかパウロの言わんとしているメッセージを汲み取って行きたいと思えます。

パウロはこの手紙で、人が神の前に義と認められ、救われるのは、イエス・キリストを信じる信仰によるのか、それとも律法を守り行なうことによるのか、について論じています。もちろん正しい福音は、人はただイエス・キリストを信じる信仰によって神の前に義と認められ、救われるというものです。この手紙の受取人であるガラテヤ人も、最初はパウロからこの福音を聞いて、信じました。しかしパウロがこの地を出て行った後に、ユダヤ主義者が入って来て、別の教えを教えました。この人たちは、割礼を受け、律法を守り行なうことを強調する人たちで、ガラテヤ人に向かって、あなたがたもそうしなければ本当の意味での神の民にはなれない、と教えました。その教えに動かされて、ガラテヤ人はパウロの教えから外れて、律法を守り行なうことによって救いを得るという立場に移りつつあったのです。

パウロが今日の箇所で見させているのは、アブラハムには二人の子どもがいたことです。すなわちアブラハムの妻サラから生まれたイサクと、女奴隷ハガルから生まれたイシュマエルです。そしてこの二人の子どもの内、どちらが神の祝福を受ける家系になったかと言えば、ご存知の通り、イサクの方です。ここに神の御心がはっきり示されているとパウロは言っています。注目すべきは23節。「女奴隷の子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束によって生まれたのです。」アブラハムとサラは、必ず子どもが与えられるという約束を受けながら、子がいないままどんどん歳を取りました。そしてもうこれでは望みがないと思われた時に、アブラハムはサラの提案を受けて、女奴隷ハガルを通して子どもをもうけ、イシュマエルが誕生します。パウロはこのことをここで、この子は「肉によって生まれ」と表現しています。すなわち自然の方法で、あるいは人間の知恵と努力によって、ということです。それに対してサラの子

イサクは「約束によって生まれた」とあります。イサクが生まれると告げられたのはアブラハムが99歳の時でした。ローマ書4章に記されていますように、アブラハムはおよそ100歳になっていて、自分の体は子をもうけることにおいて死んだも同然の状態にあり、妻サラの胎も死んでいる状態でした。なのにそのサラが子を宿しました。これは人間の知恵や努力によることではありません。ただ神の約束による賜物です。ここに神の前に義と認められ、神の祝福を受ける道とはどのような道なのかがはっきり示されています。それは肉による方法ではなく、約束により頼む生き方です。自分の知恵と力に頼る生き方ではなく、神の一方的な恵みに頼る生き方です。

ユダヤ主義者たちは、律法を守って救いを自分のものとするように教えていましたが、これは肉による生き方、人間の力に頼る生き方であって、イシュマエルのあり方に相当します。そしてイシュマエルは奴隷の子であり、奴隷でした。ですから律法によって救いを得ようとする人は、奴隷状態にあるのであり、神から真の祝福を受けて歩むイサクのあり方と違っているのです。しかし本当の祝福はイサクの側にあるのであって、そちらに見られる原則は、神の恵みにより頼む生き方、すなわち神が約束によって与えてくださったイエス・キリストにより頼む生き方だと言っているのです。そちらに、自由の女サラの子の自由があると言っているのです。

そう述べてパウロは比喩的な意味について語ります。先に述べた通り、特に24節以降を文字通りの意味で理解しようとすると頭がぐちゃぐちゃになります。あくまで象徴のようなものとして語られていることを頭に入れる必要があります。パウロはまずハガルとアラビヤにあるシナイ山を結び付けます。なぜそう言えるかと言えば、ハガルの子イシュマエルの子孫はアラビヤ地方に住んだからです。そしてそのアラビヤ地方にあるシナイ山とは、モーセが律法を授かった山です。ここに比喩がある。それは「ハガルの子」と「律法」との緊密な組み合わせです。そしてさらにこの組み合わせが「今のエルサレム」とも結び付けられています。この「今のエルサレム」とは、シナイ山で与えられた律法に従って神殿で礼拝をささげたり、祭りを行なうなど、儀式を行なうことに焦点が合っていた当時のエルサレムを指します。なぜパウロがここでエルサレムのことに触れたかと言えば、それはそのエルサレムからユダヤ主義者たちが来ていたからでしょう。彼らは自分たちは本部エルサレムから来た者たちであって、我々こそ正統的であると主張していました。しかしパウロは、そのエルサレムはシナイ山、ハガル、奴隷の子と同じグループに位置づけられる、と言っているのです。

それに対して26節に「上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。」とあります。「上にあるエルサレム」とは、地上のエルサレムと対比される霊的なエルサレムのことであり、神の祝福を受けるまことの神の民を指す言葉です。それが私たちだ、とパウロは言います。その根拠として、パウロは27節でイザヤ書54章1節を引用します。これはもともとバビロン捕囚の苦しみを刈り取ったイスラエルが、ただ神の恵みによって自分たちの地に戻って来て、祝福を受けるようになることを預言した言葉です。今日の私たちにはいわゆる不快語に当たるかもしれませんが、ここに出て来る「子を産まない不妊の女」とか「産みの苦しみを知らない

女」とか「夫に捨てられた女」とは、不幸な状態を指す表現です。私たちは当時の世界に入って行って、その意味を汲み取らなくてはなりません。そういう不幸な状態にあるイスラエルが、ただ神の恵みによって豊かな祝福を受けるようになる。これはまさにそのままサラに当てはまります。サラは長い間、子が与えられなかった女です。しかし彼女はただ神の恵みにより、子を宿します。まさに神の恵みは一方的です。ですから神の祝福に生きたいと願うなら、私たちが取るべき道は、ハガルの道ではなく、サラの道なのです。すなわち自分の力で律法を守り行なう生活ではなく、ただ神の約束と恵みに信頼して生きること、すなわち約束の子孫イエス・キリストにこそ信頼し、この方によって救いの道を歩むというあり方なのです。

こう述べたパウロは 28 節で「兄弟たちよ。あなたがたはイサクのように約束の子どもです。」と語った後、二つの具体的な適用を最後に語ります。一つは 29 節にあるように「かつて肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりです。」ということです。これはハガルの子イシュマエルがサラの子イサクをいじめた事件を指します（創世記 21 章 9 節）。パウロはこれに触れて、イシュマエルの子孫であるユダヤ主義者たちによって、イサクの子孫であるあなたがたが迫害されるのは当然のことだと言っているのです。ガラテヤ人たちはユダヤ主義者たちからしつこく、あなたがたはここが足りない、あそこが足りない、私たちの言う通りにしなければダメだ、と責められていましたが、それはまさにイシュマエルとイサクの関係と同じである。むしろそのことはあなたがたが御霊によって生まれたイサクの側に属する者であることを証明しているのだから、驚き慌ててはならないとパウロは言っているわけです。

もう一つは 30 節です。そこに「奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人になってはならない。」という聖書の言葉が引用されています。これはイサクがからかわれているのを見てたまりかねたサラが、先ほどの創世記の言葉の次の節でアブラハムに「この奴隷女をその子といっしょに追い出してください」と言った言葉を指します。一見ずいぶん身勝手なサラの言葉のようにも受け取れますが、創世記から分かりますように、神ご自身がこのサラの願いを承認し、アブラハムに妻サラの言う通りにしなさいと言われました。ここに神は重要な真理を示しています。それは約束によって生きる神の民と、そうではない人間の力によって生きる者とは同居できないということです。言い換えれば、イエス・キリストにより頼む信仰と自分のわざにより頼む律法主義とは同居できない。ですから奴隷の女とその子どもを追い出せ！というパウロのメッセージは、ガラテヤ人たちに、ユダヤ主義者たちと仲良くなるな！ということの意味したでしょうし、また律法主義の影響を自分たちの中に残さないように、それを断固として排除するように！というメッセージともなったでしょう。

私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。私たちは自分の行ないによって神の前に義を勝ち取り、神に受け入れられる者になろうとするイシュマエルの側につく生き方をする者でしょうか。それともただ神の約束により頼み、恵みに生きるイサクの側につく生き方をする者でし

ようか。重大な事実、すべての人は神の前に必ずこのどちらかであるということです。神の前に女奴隷の子なのか、それとも自由の女の子であるのか。もし私たちが律法の行ないによって義を獲得し、自分の救いを確実なものにしようとしているなら、その人はイシュマエルの系譜に属する者です。確かにその人もアブラハムの子孫かもしれませんが。しかしイシュマエルの側についていたのでは、真の祝福はありません。しかしもし私たちが神の恵みにより頼むなら、すなわちその究極的な現れであるキリストにより頼むなら、私たちはイサクの系譜に属する者です。その者こそ、自由の子です。私たちはこちらの生き方にこそ徹する者でありたいと思います。私たちはなおも神がしてくださったことではなく、自分がしたことによって神の前に立つとすることがあるかもしれません。自分の行ない、良いわざ、神に認められるような生活をもって、神に自己推薦し、神に受け入れられる者になろうとするところがあるかもしれません。しかしパウロはそれを追い出せ！と言っています。律法主義の痕跡すら、許容しないようにせよ。それを自分の中に残さず、除き去るようにせよ！と。その言葉を改めて心に刻んで、神が与えてくださったイエス・キリストにこそ信頼するように、この方にある神の恵みにこそ生きる者となるようにと願いつつ、イサクの系譜に属する者の歩み、神の恵みによって真の祝福に生きるまことの民の歩みへ進みたいと思います。